



全体的な感想

まずは学生生活から。普段の生活に関しては基本的に困ることはなかったです。僕が住んでいた IPB の寮はきれいだし、セキュリティもしっかりしているのですごく快適でした。フロントに頼めば部屋の掃除はしてくれるし、洗濯物もスタッフの方がやってくさったので、日本で一人暮らしするよりとても楽で、自由な時間がたくさんとれます。設備に関しては、すべて一人部屋でトイレとシャワー（トイレとシャワーは同じスペース）がすべての部屋についています。寮の中にはキッチンはありませんが炊飯器、電子レンジ、ミキサー、きれいな水とお湯が出るサーバーがあるので、それらを使って料理？みたいなこともしていました。

ご飯に関してですが、IPB の国際寮にはキッチンがなかったため、基本的には朝、昼、晩と外食でした。朝、晩はよく近くの商店街まで出かけてご飯を食べ、お昼ご飯は学食で食べることが多かったです。インドネシアは物価がとても安く、安いお店に行けば一食 150 円くらいで食べることができたので、食費を抑えることができました。

言語環境については、思っていたよりインドネシア語を使う場面が多かった気がします。もちろん、大学では先生方も生徒も英語を話すことができるので、英語でのコミュニケーションをとっていました。日本もインドネシアも英語が母国語ではないのに、こんなにも英語力に差が出るのかと思い、いつも刺激を受けながら生活をしていました。しかし大学から一歩外に出ると英語を話せる人はあまりいません。いつもご飯を食べたり買い物に行ったりする商店街では、ほぼインドネシア語を使っていた気がします。僕自身、英語の能力はかなり低く、中学生くらいの英語しかできませんでしたし、インドネシア語に関しては最低限の知識しかない状態で行きました。でも、インドネシアの人達は、先生も生徒も学校外のお店の人たちもみんな優しく、こちら側の意思をくみ取って会話をしてくれるので、不自由なく生活することができました。

授業はパワーポイントを使って行う座学と、その座学でやったことを実際に行う実習の授業がありました。パワーポイントがインドネシア語だったり、先生がインドネシア語しか話してくれない授業があったりと少々ハプニングがありましたが、試験前に英語の資料をもらうことができたので、どうにかなりました。試験の 3 日前に資料を渡してくる授業もあったので、なかなかきつい面もありました。実習に関してはアシスタントの方がつきっきりで指導してくれたので、困ることはあまりありませんでした。一番楽しかったと思えた思い出は、バレーボールの部活動です。これはインドネシアの友人に紹介してもらい、毎週土曜日に参加していました。バレー部の人たちも自分も英語が苦手で、会話がおぼつかなかったのですが、バレーをしているときはそんなことは関係なく楽しい時間を過ごすことができました。

履修科目

Biological Control and Habitat Management (3 単位)

Plants in the Landscape (3 単位)

Agricultural Landscape (2 単位)

Fundamentals of Landscape Architecture (3 単位)

授業から学び得た専門的な内容について

バイオコントロールの授業では、農薬はあまり使わない農業を目指すために菌や微生物、小さな虫などを用いて、農産物を食い荒らす外敵を駆除する方法を学びました。実習の時間では、座学で習った害虫とその天敵を利用して、どのような相互作用が起きるかなどを実験して、理解がさらに深まりました。ランドスケープの授業は、ランドスケープの基礎、農業のランドスケープ、植物のランドスケープの3つを受けていました。基礎の授業では、ランドスケープというものはいったい何なのか、ということや、世界とインドネシアのランドスケープの歴史、実際に公園などをデザインする際に、どのような流れでデザインをしていくかなどを学びました。農業のランドスケープでは、農業のランドスケープの特徴や家の庭に作る家庭菜園のランドスケープ、都会の農業のランドスケープ、アグロツーリズムなどについて学びました。植物のランドスケープでは、各々の植物が周りに与える影響を考えたうえで、各々の植物をどのような場所に植えていくかといったことや、それを踏まえて実際に公園をデザインするといったことを行いました。ランドスケープに共通していえることは、人が美しいと思うものや快適に思うものをデザインしなければならないが、そのために自然を壊してはいけないということ、環境に良いものでなければいけないということが条件にあるので、そのバランスをどうとるか、という難しさでした。

自らの専門分野との直接的または間接的な関連性について

バイオコントロールについては、低コストでインドネシアでよく使われているということで学びました。農作物に寄ってくる害虫に対して、農薬の代わりにその害虫の天敵を使って農薬をあまり使わない有機農業を目指しています。だから、これを取り入れることができれば、結果的に環境に配慮した農業になると思います。ランドスケープに関しては、たくさんの地域に今ある耕作放棄地や農村地域にランドスケープの考えを取り入れることにより、アグロツーリズム的な要素で観光客が増え、あまり環境を壊すことなく、その地域の活性化や発展を望むことが可能だと思います。

海外の大学で授業を履修するにあたって工夫した点

私は英語が苦手で、座学の授業で先生が話したことを一回で聞き取り理解できる自信がなかったので、毎回の授業の後に必ず授業で用いたパワーポイントの資料をもらい、寮に帰ってから、自分で辞書などを用いながら復習するようにしていました。また、授業中にわからないことがあれば積極的に先生に質問するようにしていました。実習中ではグループワークが多く、インドネシアやマレーシアの学生と組むことが多く、積極的に話しかけることを心がけました。

地域環境科学科 A.A.



全体的な感想

私は、学部3年次の2014年9月から、AIMS派遣プログラム学生としてインドネシアのボゴール農科大学（IPB）に1学期間の留学をしました。AIMSプログラムとは、インドネシア、マレーシア、タイなどのASEAN諸国の教育連携プログラムで、私たちは日本の11大学から参加した第1期生でした。IPBでは農学部（Faculty of Agriculture）のLandscape（造園）学科に所属し、景観論などの講義を受講しました。茨城大学農学部では、地域環境科学科緑環境システムコースに所属して農業経済学を学んでいたため、Landscapeに関する知識は全くありませんでした。初めて経験する学問分野の世界で、周りのインドネシア人学生や日本人学生の協力を得ながら、なんとか学習を継続することができました。

インドネシアの大学での講義は、多くが演習とセットになっています。そのため、毎週のように、野外実習やプレゼンテーションの機会がありました。中間試験と期末試験がきちんと実施され、レポートやプレゼン準備で忙殺されることも多く、必死で勉強しました。留学生への配慮が足りないことも多く、困ったこともたくさんありましたが、4科目（11単位）を習得して帰国することができました。インドネシアはイスラム教徒が国民のほとんどを占めており、文化風習が日本とは異なるため、はじめは外に出掛けることさえも緊張してばかりでした。郵便局や病院では現地の言葉しか通じず、インドネシアの友人にたくさん助けられました。この留学では、インドネシアの学生や教職員だけでなく、現地に滞在していた他の大学の学生との交流も、私にとって重要な財産になりました。日本人だけでなく、マレーシア、タイ、ベトナム、ドイツなど様々な国の留学生と一緒に生活し、共に勉強できたことが、とても楽しい経験でした。

大学生のうちにこのような経験ができたことは、自身の進路を選択するうえで、非常にプラスになりました。英語もインドネシア語も、すぐく上達したという訳ではありませんが、異なる言語で自分の意思を伝え、相手の考えを受け取ることの難しさと楽しさを、十分に学ぶことができました。インドネシアでの5か月間は、想定外の出来事の連続で、日本ではあり得ない視点から、自身の可能性を捉えることができました。通常の学生生活では得られなかったこの経験を、今後の人生に生かしていきたいと思います。

履修科目

Biological Control and Habitat Management（3単位）

Plants in the Landscape（3単位）

Agricultural Landscape（2単位）

Fundamentals of Landscape Architecture（3単位）



全体的な感想

今回の AIMS プログラムへの参加は、私にとってとても良い経験であり、とても充実した時間を過ごすことができました。インドネシアに行くのは7回目でしたが今回の渡航では今までとは違うインドネシアを見ることができました。

私の留学の目的は、語学を学びたい、違う文化の中で生活してみたい、半年間を日本の怠慢な生活で無駄にしたいくなかったなど、とても簡単なものでした。今、留学を終えて振り返ってみると、目的以上なものを得たと思います。その中でも異文化を感じるという面では多くのことを学びました。インドネシアの人々は知らない人にとってもフレンドリーに接してくれるので、多くの友達を作ることが出来ました。積極的に行事に参加することが大切です。

私がインドネシアに行き一番驚いたことは、宗教の違いです。最初は、一日複数回のお祈り、豚肉を食べない、アルコールを飲まないことなどに違和感がありました。しかし、月日が経つうちにその違和感もなくなり、だんだん過ごしやすくなってきます。授業面では、基本的には英語ですが時々インドネシア語も使われていました。そのような場合、インドネシア人の友達に訳してもらい学んでいたことを覚えています。インドネシアの学生は英語がとても上手でした。そこで、「何でみんな英語が上手なの？」と質問してみると、「みんな外国で勉強したからだよ。」と答えていました。これが茨城大学の学生とインドネシアの学生の英語力の違いだと感じました。

最後にインドネシアの約半年間の生活を終えて、日本では当たり前だと思っていたことが、日本から一歩外に出てしまえば当たり前な事ではなくなってしまうこと。普段の生活の中で、視野を広げれば多くのことを発見することが出来ること。様々な経験をすることで自分の考え方を見直すことが出来ることなど多くの発見がありました。

もし、海外留学に少しでも興味があるなら絶対に挑戦するべきです。最高の人生経験になると思います。

履修科目

Biological Control and Habitat Management (3 単位)

Plants in the Landscape (3 単位)

Agricultural Landscape (2 単位)

Fundamentals of Landscape Architecture (3 単位)

授業から学び得た専門的な内容について

インドネシア・ボゴール農科大学では、景観論について学びました。授業の中で、公園の設計や植物の利用について多くの実習を行いました。たとえば、グループで実際にある一つの公園を選び、その公園をもっと効率よく利用してもらうために自分たちで設計するという作業を行いました。その他、景観の勉強のためにマングローブを植えるなどの実習、様々な場所に行きスケッチを行いプレゼンテーションをする実習など日本では経験したことのない内容ばかりでした。その他に、Biocontrol and habitat という授業では生物防除や農薬について学びました。私の中ではこの講義が一番新しい専門的な知識を多く学べた実感がありました。ちなみにこの講義では、クワコナカイガラムシについてレポートを書きました。今まで全く興味がなかった分野でしたが、とてもやりがいのある講義でした。インドネシアで学んだ様々な専門的な内容を、今後の学生生活に活かしていきたいと思います。すべての講義に対して言えることですが、英語での講義は語学力を上げるためには良い機会でした。最後にインドネシアで学んだことは今まで学んだことのない専門的な内容でした。しかし、多くの分野を学ぶことで自分の専門分野を学ぶ時の視野が広がりました。

自らの専門分野との直接的または間接的な関連性について

インドネシア・ボゴール農科大学で学んだ事は自分の専門分野とは全く別物で、すべてが初めて学ぶことでした。しかし、講義の回数を重ねていくと専門分野との関連性を見つけることが出来ました。それは、「環境」についてです。私が学んだ景観論、農業の生物利用どちらも環境を基盤と考えられていました。そのため、現地の先生たちは日本の農業の環境に対する意識について、とても興味を持っていました。授業以外の時間でも先生たちと「環境」について多く会話をしていた記憶があります。

海外の大学で授業を履修するにあたって工夫した点

私がインドネシア・ボゴール農科大学で勉強するにあたって工夫した点は二つあります。一つ目は、現地の学生と早く友達になり一緒に勉強することです。そうすることで、インドネシア語の資料を渡されても、問題なく利用することができます。二つ目は、積極的に課外実習に参加することです。参加することで現地の学生、さらに先生たちと仲良くなることが出来ました。私は自分の学んでいた学科だけではなく、その他の学科にも友達がいたので、様々な課外授業に参加していました。